

carebeauty For you..

後藤美歩

代表



090-2684-8149

miho_carebeauty_life

神奈川県横浜市神奈川区金港町
5-14

ビジョン

介護美容の力で生きる力と生きる喜びを
その人らしく、心穏やかに
最期まで笑顔で輝けるよう
1人ひとりの心に寄り添います

個別性や多様性が重視される昨今、在宅医療現場でもさまざまなニーズに対応した訪問自費サービスが注目されてきています。今回は横浜市神奈川区、戸塚区、保土ヶ谷区、泉区などを中心に訪問介護美容サービス「carebeauty For you..」を運営されている介護美容セラピスト後藤美歩代表です。これまでの歩み、訪問介護美容サービス、そして今後の介護・福祉サービスに向ける思いを熱く語っていただきました。（2025年5月取材）

叔父の最期と母のことばー「その人らしさ」に寄り添う看護師になりたい

看護師を目指したきっかけを教えてください。

私が高校1年生のときに肺がん末期で入院していた叔父の死と、母の言葉がきっかけでした。優しくてたくましい叔父が息苦しそうに食事もとれず、やせ細ってしまっていて……。それまで「死」を身近に感じたことがなかった私にとって、叔父の姿は衝撃的だったのだと思います。

「人生の最後が痛みや苦しみ、つらさで終わってしまうのは、こんなに悲しいことなんだ」と叔父の最期の姿が心に残っていました。そんなときに母が、「美歩は優しいから、看護師さんが向いてるんじゃない？」と声をかけてくれて。

叔父の最期と母のことばが重なり、「終末期に関わる看護師になりたい」って強く思うようになったんです。

聖隷クリストファー大学の看護学部を選ばれた理由がありますか。

日本ではじめてホスピス病棟が開設されたのは、聖隷三方原病院なんです。そのグループ校である聖隷クリストファー大学で、終末期ケアを学びたいと思いました。この大学はキリスト教の教えを大切にされていて、「隣人愛」の言葉があって、「自分を愛するように、隣の人も愛しなさい」という考えが私の思いと重なったんです。

私は「その人らしく過ごせるように、人生の最期まで寄り添いたい」という気持ちがあったので、この大学で学ぶことの意味も感じて選びました（□日本ホスピス緩和ケア協会「20年の歩み」）。



高校生の頃、自宅にて



看護大学生での実習にて

大学卒業後の経歴を教えてください。

ホスピス病棟で働くには看護師の臨床経験3年以上が目安だったので、大学卒業後まずは聖隷三方原病院の内科病棟で働きはじめました。ただ、想像以上に大変でしたね。私のいた内科病棟は医療処置に追われる毎日で、「人に寄り添いたい」という自分の気持ちと現実のギャップに戸惑うことばかりだったんです。「ゆっくり患者さんと関わりたい」と考えるようになり、2000年までの3年間ほど務めてから療養型の病院へ転職しました。

療養型病院では2年半ほど働いたのですが、だんだん医療処置もやりたい気持ちが出てきてしまって。そんなときに、聖隷横浜病院の新設の話を聞き、「新しい病院の立ち上げにチャレンジしたい」と環境を変えることにしました。



看護師としてスタートした頃、仲間たちと
(2列目、左から3番目が私)

新しい病院や病棟の立ち上げは大変だったと思います。実際に働かれてみていかがでしたか。

聖隷横浜病院は、国立病院からの移行であり、スタッフの経歴もさまざまでした。国立病院時代からの職員に加え、他の聖隷グループの病院から異動してきた方や、外部から新たに加わった方など、本当に多様な背景のメンバーが集まっていました。それぞれの方向性や価値観がありますし、ゼロからのスタートだったので、大変なことばかりでしたね。

でもスタッフのみんながついてきてくれて、一緒に病院や病棟をつくり上げていく過程には大きなやりがいと達成感がありました。これまで経験したことがなかったのですが、貴重な体験でしたね。このゼロからなにかをつくり上げていくことに魅力を感じたことも、介護美容をはじめる決意につながったと思っています。

これまでのご経験の中で、終末期やホスピスに携わる機会がなかったように感じましたが、もどかしさはありませんでしたか。

それがなかったんです。2003年から3年間、聖隷横浜病院に勤めた後、派遣看護師としてさまざまな現場を経験し、最終的には施設で働くことを選びました。というのも、ちょうどその頃から「看取り」が行われる施設が増えてきました。

施設の看護師は、利用者の方が日々を安心・安全に過ごせるようにサポートすることが役割のひとつなので、病院のような慌ただしさがなく一人ひとりとゆっくり関わることができました。ご自宅やご家族と離れて暮らす施設には、不安や孤独を抱える方も多いのですが、そんな方々の思いや声に寄り添う時間がありました。私たちスタッフは利用者の方々が生息する空間で過ごすので、まさに家族のような関係性が築けるんです。その中で「最期の時間をどう過ごすか」を一緒に考えることができました。

「最後はここで過ごしたい。病院にはいなくていいよ」「飲めなくなってもなにもしないでね」と、一人ひとりそれぞれの希望に寄り添いながら、最期を支えることができました。

その経験を通して、「私のやりたかったことはホスピスじゃなくてもできるんだ」と気づくことができたんです。施設だからこそ感じることもできたやりがいや関係性ばかりで、もどかしさはありませんでしたね....



続きはQRコードからアクセスしご覧ください → → →